

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合上、本文を省略した箇所がある）。

いま僕たちは商品経済の支配する社会のなかで暮らしている。とともにどこかの国に属して暮らしている。このふたつの前提のもとで、僕たちは一人一人が個人になって、個人主義的な生き方をしている。しかもそこで生まれてくる個人同士の競争と a ミリヨクのない労働、生活のなかに身を置いている。とともに僕たち自身が、程度の差はあっても、一面でこの社会に絶望し、他の面で新しい未来をつくりたいと思い、さらに別の面でこの社会のなかでの自分の成功物語を夢みるという三つの時代精神を一緒にもっている。

① これらのことは、すべて現代人たちの特徴だと思う。そうしてこういう事柄を、はじめて哲学のなかで問題にしようとしたのは、近代の西洋哲学だったと思う。だから現代の哲学を考えるときには、一度は西洋哲学から学ぶ必要性が生まれてくると思うんだ。

しかし僕はこの※1「哲学ノート」をつくりながら、重要なことを発見したような気がするんだ。中世のヨーロッパ哲学は神についての研究、キリスト教神学が哲学の中心だった。それが近代以降の時代になると人間学としての哲学が b タイトウしてきた。中世後期に「我思う、故に我有り」といったデカルトはその c センクシヤだったし、ドイツでも、後に人間をすべての中心にすえた哲学をつくり出したフオイエルバッハのような哲学者が現れてくる。

この傾向は人間の解放を哲学の課題にしたマルクスを生みだし、またシュテイルナーやケルケゴールらの実存主義の哲学をつくり出した。人間とは何か、またいかに生きるべきか、この問いを出発点にしてあらゆることを考えていく、それが僕は近代社会が生み出した新しい哲学だったと思う。だからこそこの新しい哲学は庶民のもつ時代精神と密接に結びついていたのだと思う。

この新しい哲学の流れが形成される前史として、いくつかの d カトキの哲学が生まれた。それがドイツ古典哲学だったと思う。新しい時代の人間の論理と倫理を探した点では、カントもヘーゲルも新しい時代の哲学者だ。しかし新しい時代に生きる人間そのものの悲しみのなかにまで入っていくことができなかったという点では、彼らは旧世代の哲学者に属する。② この両面性のなかからつくりられてきた代表的な哲学が、真理の体系としての哲学というヘーゲルの考え方だ。全世界のあらゆる出来事を理解できるような真理の体系、それが哲学だとヘーゲルは考えた。

僕は現代の哲学はこのことを克服しなければいけないと思う。哲学を人間から超越した真理にしてしまっってはいけない。もしある哲学が絶対的な真理だということになったら、人間がその哲学に命令されるというおかしなことが発生してしまうのではないか。「科学的社会主義」の誤りもそこにあると思う。どんな哲学も思想も人間がつくったものにすぎないのに、ある哲学や思想を絶対視して、「正しい」社会主義思想と称するものによって社会をつくり、人間たちを理論に f フクジュウさせる、そうやってつくりられてきたのがいまの社会主義社会だ。

③ この誤りを繰り返さないためにも、僕たちは哲学は絶対的な真理を追求する学問だという考え方を克服しなければいけないんだ。

哲学は真理である必要もないし、理論体系である必要はますますないと思う。④ ただの人間学であるべきだ。不完全な人間たちがある時代を支え、新しい歴史をつくりついでいく、その不完全さのなかから出発し、人間たちの未来を探りつづけるなかに哲学はありつづけるべきだ。たとえそこからどんな広範囲なことを研究していったとしても、現代哲学の原点はここにあると僕は思う。

そうしてこう考えるとき、西洋哲学とすぐれた東洋哲学の間のへだたりもなくなっていくと思う。不完全な人間が自分の解放を求めるとき哲学を探しはじめることをはつきりしたのは親鸞だった。東洋哲学には、近代社会の人間の問題をとらえられないという弱さが往々にしてあるけれど、逆に哲学は人間学だという地点には西洋哲学より早く到達していたと僕は思う。

さてこの『哲学の冒険』第二章をおして僕が学んだのはこういうことだった。そうしていま僕はこんなことを考えている。それは⑤ 僕たちは老いすぎてしまっているのではないかということなんだ。

モンテスキューが『法の精神』を書いて、はじめて自分の意見を発表するのは六四歳のときだ。エピクロスも哲学を学ぶのに年齢は関係ないといっていた。僕は哲学者たちの精神を支えていたのは、あらゆることに疑問をもち、新しいことに挑戦し、人生は冒険だと考えるような精神だったと思う。考えてみればすぐれた哲学者のなかで安楽な生活を送れた者は少ない。せつかく自分が築きあげたものをすべて投げ捨てて、各地を歩き、貧困のなかで死んでいった哲学者がどれほど多かったことか。

なぜ彼らにそんなことができたのだろう。それは彼らが人間の未来に情熱をかたむけつづけたからでもあるし、新しいものに挑戦し、冒険しつづける精神をもちつづけていたからでもある。しかし哲学者の歴史も人間たちの歴史も、そういう精神によつて動かされてきたのだ。哲学者たちが新しいことを語ったとき、そんなことは実現不可能だと笑った人たちが必ずいたはずだ。しかしそんな人たちは歴史を一步でも前にすすめることはできなかっただろう。

僕はマルクスのこの言葉が好きだ。

「人間はつねにみずから解決しうる問題のみを問題とする」

人間が考えることは、すべて実現可能なことだけだ。なぜなら、そういうことを考えさせる原因が社会のなかにあるからだ。その社会が新しい社会へと生まれ変わらなければならない理由があるとき、人間もそのことを考えはじめると、だから人間は実現可能なことしか考えない、それがマルクスの言葉だった。

もつとも美しく生きてみたいという夢を人間はもっている。その夢を実現させたいと思う。その人生最大の冒険とともに哲学はあるのだと僕は思っている。

(内山節『哲学の冒険』による)

注 ※1 「哲学ノート」——「どんな生き方をしたっていいよ。ただ哲学のある生き方を父さんはして欲しいな」という父親の言葉を受けて、十五歳の時から書き続けた、筆者の哲学探求記録。

問1 波線部aとeのカタカナを漢字に直せ。

問2 傍線部①「これらのことは、すべて現代人たちの特徴だと思う」とあるが、「現代人たちの特徴」の説明として適当でないものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 一人一人が個人になって単調な労働が続く生活を繰り返している。

イ 自分の成功物語を夢みてどこかの国に属して暮らしている。

ウ 個人主義的な生き方をしつつ新しい未来をつくりたいと思っている。

エ 社会に絶望し、新しい未来の成功物語を思い描けずにいる。

オ 商品経済の支配する社会のもと個人同士が競争に身を置いている。

問3 傍線部②「この両面性」とはどういうことか。八十字以内で説明せよ。

問4 傍線部③「この誤り」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 人間が作りだした体系的哲学を絶対視することで人間的な生き方を抑圧してしまうこと。

イ 新しい哲学にこだわることによってかえって個人主義的な自由の追求が制限されてしまうこと。

ウ ある特定の社会体制の維持のために革新的な思想をもつ哲学者が迫害を受けてしまうこと。

エ 体系化された哲学的思想は時代を超越した普遍性をもつ真理であると考えてしまうこと。

オ 真理の体系としての哲学は神を超えてあらゆるものを理解することができると思ってしまうこと。

問5 傍線部④「ただの人間学であるべきだ」とあるが、ここでいう「人間学」の内容を説明した箇所を、傍線部④より前から解答欄に合うように四十五字以内で抜き出し、最初と最後の三字を答えよ。

問6 破線部「しかし僕はこの『哲学ノート』をつくりながら、重要なことを発見したような気がするんだ」とあるが、筆者が発見したことの説明として適当なものを、次のア～オのうちから二つ選び、記号で答えよ。

ア 今の哲学は不完全なままなので、実現可能な意識改革を一步進めることが急務であるということ。

イ 冒険心を心に抱く人間が、新しく体系化された哲学のもとで前向きに自己改革を遂げていくということ。

ウ 不完全な人間が自分たちの生き方や未来を模索することこそが哲学のありかたであるということ。

エ 近代社会が生み出した新しい哲学は、庶民のもつ時代精神と少し離れたところに存在するということ。

オ 人間の不完全さをなくすための哲学的思考は、批判的精神を育むところから生まれてくるということ。

カ すぐれた東洋哲学は、西洋哲学より早く哲学は人間学だという地点に到達していたということ。

問7 傍線部⑤「僕たちは老いすぎてしまっているのではないかということなんだ」について生徒AとEが次のようなやりとりをしていた。傍線部について正しく理解した発言として適当でないものを、ア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 生徒A「老いすぎてしまっている」という言葉については考えさせられるよな。確かに、しりごみしがちな人は新しい

ことを切り開く情熱と冒険しつづける精神を持っていったんだよね。

イ 生徒B「そんな人たちがたくさんいれば、歴史を前に進めるなんてできないよね。でも、すぐれた哲学者たちは人間の未

来を切り開く情熱と冒険しつづける精神をもって生きることが、ここでいう「美しく生きる」ことにつながるよ。

ウ 生徒C「そうだね。そして、そういう精神をもって生きることが、いつまでも楽しく生きられる世の中になっていくんだよね。

エ 生徒D「僕もふと考えるよ。便利な社会に暮らしているはずの僕らの日常に、どうして生きづらさがつきまとうのか。マ

ルクスが言ったように、人は解決可能な問題だからこそ問題にするのだと考えると、今の社会を新しい社会に変

えていく時が来ているのかも知れないね。

オ 生徒E「なるほどね。自分は今まで、貧困に苦しんだりしてまで未来に情熱をかたむけることなんてできない、安楽な生

活ができればいいと思っていた。でも、筆者が「老いすぎてしまっている」と感じているのは、こんな考えに対

してじゃないかって気づいたよ。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合上、本文を省略した箇所がある）。

佐古啓介の営む古書店で高価な本が四冊も盗まれる。いつ、誰が盗んだか見当もつかない。そんな時、見かけない若い女（『女子大生』）が三日連続で店を訪れる。

I 若い女は初めて佐古書店に現れたときから、啓介の注意をひいた。

ふだん見かけない顔だったからではない。容貌が美しかったからでもない。なんとなく挙動に落ち着きがなかったせいである。おととい、その女が店を立ち去ったとき、啓介はすぐさま本棚を点検した。なくなっている本はないかを調べた。消えている本はなかった。二回目のきのうも同じだった。女は夕方、佐古書店に現われ、いつとき本棚の前でうろろして出て行った。そのあと、啓介は入念に本を調べた。盗られたものはなかった。

この女が犯人なのだろうか？

そう思っただけで啓介は息苦しくなった。

心臓がふくれあがって咽喉もとまでせりあがったような気分になった。① 挙動は腑に落ちないけれど、若い女はどう見ても本泥棒のように思えない。一、二度、目が合ったとき、女は怯えたような表情を見せた。しかし、女の目は涼しく、濁りがなくて、暗いかげりは認められなかった。

II

時間は早いけれどもシャツターをおろすことにした。きょうは商売する気分ではない。

シャツターを閉じ、ガラス戸を引いて、明りのスイッチに手をのぼした。習慣的に本棚を見まわした。スイッチを押す直前、それが目にとまった。啓介は初め、サツカグかと思った。本棚に近よって調べた。内田百閒の『新方丈記』である。

啓介は念のため抜きとって点検した。

裏表紙に佐古書店のシールが貼ってあった。きょう、本棚をすみずみまで調べたときには見あたらなかったのだ。いつ、ここに押しこまれたのだろう。X めばしい客を思い返してみた。何人かの客が古本を売りに来た。買いにも来た。みな近所に住む顔なじみである。一人ずつ消去してゆくと結局、のこるのは赤いブレザーコートを着た女子大生しかない。

——やっぱり、あの女が犯人だったのだろうか。本を盗みはしたものの、罪の意識に耐えかねて、こっそりと返しに来たのだ。初めはそう思ったが、② 腑に落ちなかった。わざわざ返しに来るといのがおかしい。小包みにして送ればすむことなのだ。

見つかる危険を冒してまで、盗んだ本を棚に戻したのはなぜだろう。女子大生は教科書の上に『新方丈記』を重ねて持ち、啓介が気づかないうちにそれを本棚に収めたのだ。すると、残りの三冊も彼女が盗ったのだろうか。啓介は再びスイッチの所に戻り、こぶしでトンと叩いて明りを消した。

III

「そうなの、戻ってるの」

※2 友子は啓介から『新方丈記』のことを聞いて本棚を見に行き、首をかしげながら居間にひき返して来た。本が戻っているからといって、必ずしもあの女子大生が犯人とはかぎるまいという。啓介は日ごろ友子の意見を尊重して来た。男が考えつかない見方を口にしてはつとさせられることが多いからだ。

「別人が盗ったのを女が返しに来たともいうのかい」

と啓介がいうと、はつきりしたことはいえないけれどもと前置きして、友子は女子大生を本泥棒ときめつけるのは早まっているような気がする、といった。

「根拠はないの、女の直感っていうのかしらね、なんとなくそう思えるだけ」

「おれもそうなんだ」

「お兄さん、あの学生が好きなんでしょう。わかるわよ」

女はこうだからと啓介は苦笑した。話につじつまが合わない上に、とんでもない論理の b ヒヤクがあると指摘した。友子はうつすらと笑って、いった。

「今度、あの人が来るのを楽しみにしてるでしょう」

「もう来ないよ。おれがトンマな店番だと見抜いてはいるだろうが、二度もあぶない橋を渡るようなことはしないだろう」

IV

一週間たった。

啓介はなるべく外出を見あわせて、電話ですませられる用件は電話ですませた。自分が店をあけている間に、女子大生が来はしないかという不安があった。客が店に這入ってくるつど、あの女子大生ではないかと思った。日が過ぎるにつれて、女の顔はますます鮮やかになった。店番をしながら女と交わした短いやりとりを何べんも反芻した。

通っている大学は教えられたけれども、名前がわからない以上、問合わせられはしない。まさか校門の前で見張るわけにもゆかない。啓介は『新方丈記』を調べた。裏表紙のシールは値札がついたままだから、佐古書店の外へ持ち出して、よその古本屋へ売り払ったのを買戻したのではない。それはわかる。

啓介はページをめくった。読む気はなかった。手紙か紙片でもはさんでありはしないかと思ったのだ。それらしいものは無かった。さいごのページまでめくって、もう一度、第一ページに戻った。黒い筋が目にとまった。一本の頭髮である。啓介は眉をひそめてそれをつまみあげた。長さは十センチほどである。髪の毛がはさまっていたページを見た。煙草の灰がくっついていて、ビスケットの粉のようなものも付着している。

啓介は髪の毛を明りにかざした。

匂いを嗅いでみた。かすかに※³トニックの匂いがしたように思った。女の髪は茶がかかっていたようだ。この頭髮はまっくろである。ちぢれてもいない。短く刈った女の髪には全体に軽くウェーブがかかっていた。

V 郵便局に這入って啓介は小包を受けつける窓口へ進んだ。さいわい混んでいない。三人の男女が啓介に背中を見せて順番を待っている。その一人を見て啓介は棒立ちになった。

あの女子大生だ。

きょうは黒いブレザーを着ている。啓介はこつそりと女の後ろに歩み寄った。郵便局員と何か話している。局員はいった。

「小包を書留になさりたいのなら、おたくの住所氏名を記入してもらわなければ困ります」

「どうしても記入しなければなりませんか」

女子大生は困惑したような口調でたずねた。常識だろうと初老の局員は Y たしなめて茶色の紙で、ホウソウした四角な包みを押し返した。女の肩ごしに啓介は小包の宛名を読みとった。杉並区阿佐谷北一の一六の五、佐古書店御中。

「切手を貼る必要はありませんよ」

女は目を一杯に見開いて立ちすくんだ。小包を胸にしっかりと押しつけた。外へ出ないかと、啓介は誘った。ふり向いて出口へ向かった。後ろからためらいがちについて来るブーツの音を耳で確かめた。

郵便局の近くに小さなキツサ店があった。啓介は店の奥まった所に女子大生を導いた。彼女は依然として小包を両手で胸に抱いている。奪われまいとでもするように。客はカウンターに一人しかいなかった。啓介は椅子に浅くかけた女子大生をみつめた。

「小包をいただきましたか。宛名はうちになつてますから。ここでお会い出来て良かったです」

そういわれて女は初めて自分が抱きかかえている小包に気づいたようだった。すばやくテーブルに置いて目をそらした。

『新方丈記』を返したのもあなたでしょう。小包の中身は『時の崖』と『みだれ髪』それに『鍵』ですね。返してもらえれば何もいふつもりはありません」

啓介は息をのんだ。女がぐらりと上半身を傾け、テーブルに突っ伏すような恰好になったのだ。女はしばらく啓介に身をかがめて体を持ち上げた。

「すみませんでした」

かぼそい声で女はつぶやいた。

「あなたがあやまることはないでしょう。本を盗ん……本を持ち出した当人ではないんだから」

女は目を伏せている。

「誰なんですか」

ウェイトレスがコーヒを運んで来た。しばらく沈黙が続いた。啓介の方が先に口を切った。

「あなたは本を古本屋から持ち出すような人じゃない」

「さあ、どうですかしら」

「誰をかばってるんです。なぜ、かばう必要があるんです」

「あのお、お金なら少し持合せがあります。本を盗んだことで生じた損害というかご迷惑というか、お金でベンションできるものならさせていただきます」

女はハンドバッグを開いて折りたたんだ千円紙幣を何枚か取り出した。啓介はあわててそれを押しとどめた。金を要求しているのではないと大声でいった。カウンターの客がふり向いてこちらに目をやった。

「じゃあ、あたし、これで失礼します」

女は立ちあがった。啓介は待つて下さいといった。女は十秒ほど突っ立って啓介を見下ろしていたが、がくりと椅子に崩折れた。椅子がそこになければ、床に倒れてしまいそうなすわり方だった。まぢかに見ると、女の顔にはやつれがうかがわれた。目のまわりに薄い隈がある。女はコーヒークップに指をかけた。カップと受皿が触れあつて鋭い硬質の響きを発した。女は指を慄かせていた。

(野呂邦暢『本盗人』による)

注 ※1 『新方丈記』——盗まれた本の一冊。後の『時の崖』『みだれ髪』『鍵』も盗まれた本。

※2 友子——啓介の妹で、よく店番をしている。

※3 トニック——育毛・整髪剤。

問1 波線部 a s e のカタカナを漢字に直せ。

問2 二重傍線部 X 「めぼしい」・Y 「たしなめて」の語句の意味として最も適当なものを、次のア～オのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | |
|---|--------|---|-------|
| X | | Y | |
| ア | 目立つ | ア | なだめて |
| イ | 目新しい | イ | 注意して |
| ウ | 目の利く | ウ | 見くだして |
| エ | 目安になる | エ | 説きふせて |
| オ | 目が離せない | オ | 叱りつけて |

問3 傍線部①「挙動は腑に落ちない」、②「腑に落ちなかった」とあるが、両者の内容の違いについての説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア ①は、女が連日来店してしばらく本を眺めていたことは本泥棒と推測できるということ。②は、小包にして送り返してこなかったのはわけがわからず、他の誰かをかばったの行動だと思われるということ。

イ ①は、本棚の前での落ち着きのない女の動きはいかにも本泥棒のように思えるということ。②は、発覚する危険を冒してまで本を返しに来たことからすると、女が本泥棒であると単純には思えないということ。

ウ ①は、女が涼しげなまなざしによって自分を油断させ本を盗ったに違いないということ。②は、罪の意識に耐えられずこっそり本を返しに来るほどの人間なら、最初から本など盗むはずがないということ。

エ ①は、本棚の前でうろろしている女の姿と目つきが本泥棒に似つかわしいということ。②は、発覚しないうちに本を戻すという行為が罪意識と明白に矛盾するので、女が本泥棒ではないと確信できるということ。

オ ①は、女の怯えたような表情が本を盗んだことの証拠であるように思えるということ。②は、高額で売れる本なのにわざわざ戻しに来たことが不可解なので、女が本を盗んでいないことの根拠になり得るということ。

問4 本文Ⅰ～Ⅲにおいて、友子と啓介は本泥棒についてどう思っているか。その説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 両者とも女が本泥棒ではないようだと思っているが、友子は根拠もなくただ感覚的に判定し、啓介は確かな証拠に基づいて論理的に導き出している。

イ 両者とも女が本泥棒ではないようだと思っているが、友子は啓介の話から女に同情して犯人視せず、啓介は女への好意から無意識のうちに犯人視を避けている。

ウ 両者とも女が本泥棒ではないようだと思っているが、友子は女性特有の直感を働かせてそう感じ、啓介は古書店主としての経験だけに頼って推測している。

エ 両者とも女が本泥棒ではないようだと思っているが、友子の根拠は同性だからこそ分かる直感であり、啓介は自分が好意を持った女を犯人にしたいと考えている。

オ 両者とも女が本泥棒ではないようだと思っているが、友子は啓介の話からそう感じているだけで、啓介は自身の女に対する細かい観察と推論によって判断している。

問5 傍線部③「息をのんだ」とあるが、この場面での啓介の心理を説明したものととして最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 女の反応が想定以上だったので、どんな言葉が聞けるのか緊張しながらじっと見守っている。

イ 女の反応が想定以上だったので、思いがけない事態のなりゆきにひどく胸騒ぎがしている。

ウ 女の反応が想定以上だったので、突然の申し出をすべきでなかったと後悔し言葉をなくしている。

エ 女の反応に手応えを感じつつも、どう対応したらよいか分からず呆然としてたずんでいる。

オ 女の反応に手応えを感じつつも、もう少し言い方を考えるべきだったと心苦しい思いをしている。

問6 傍線部④「女は十秒ほど突っ立って啓介を見下ろしていたが、がくりと椅子に崩折れた」とあるが、この場面での女の心理状態を七十字以内で説明せよ。

問7 本文の表現の特徴として適当でないものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 擬声語・擬態語や比喻表現を使うことで、登場人物の気持ちや場面の様子をありありと浮かび上がらせている。

イ 犯人を推理する場面では微細な物質や色・匂いまで書き込むことで、読者に謎解きの緊張感を味わわせている。

ウ 店主と女との対話では店主に多くの発言をさせ、女を受動的にすることで、両者の立場の違いを描き出している。

エ 実在する書名や詳しい住所を書き入れることで、この小説に架空の話とは思えないような現実味を加えている。

オ 「三冊」「十センチ」など具体的な数字を挙げることで、店主のこだわりの強さや神経質な性格を印象づけている。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、※1甲斐国に※2館の侍なりける者の、夕暮に館を出でて家さまに行きける道に、狐のあひたりけるを追ひかけ、引目して射ければ、狐の腰に射当りてけり。狐射まるばかされて、鳴きわびて、腰をひきつつ草に入りけり。この男引目を取りて行く程に、この狐腰をひきて先に立ちて行くに、①また射んとすれば、A失せにけり。家いま※5四五町にと見えて行く程に、この狐二町ばかり先だちて、火をくはへて走りければ、「火をくはへて走るはいかなる事ぞ」とて、馬をも走らせけれども、家のもとに走り寄りて、人になりて火を家につけてけり。「②人のつくるにこそありけれ」とて、※6矢を上げて走らせけれども、Bつけ果ててければ、狐になりて草の中に走り入りて失せにけり。さて家焼けにけり。

かかる物もたちまちに仇を報ふなり。これを聞きて、Yかやうの物をば構へて※7調ずまじきなり。

(『宇治拾遺物語』による)

注 ※1 甲斐国——現在の山梨県にあたる地域。

※2 館の侍——国守の役庁に仕える侍。

※3 引目——ひきめ。殺傷目的ではない、競技用の矢。

※4 射まるばかされて——射転がされて。

※5 四五町にと見えて行く程に——四、五町先と思われるあたりにさしかかったところに。一町は約一一〇メートル。

※6 矢を上げて——弓に矢を取り付けて。

※7 調ず——痛めつける。

問1 破線部X「くはへて」・Y「かやう」の読みを現代仮名遣いで答えよ。

問2 二重傍線部A「失せにけり」・B「つけ果て」の意味として最も適当なものを、次のア～オのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | |
|---|-------------|---|----------|
| A | | B | |
| ア | 忘れ去ってしまった | ア | 後をつけまわる |
| イ | 意気消沈してしまった | イ | 矢を作りかえる |
| ウ | 息を引き取ってしまった | ウ | 火をつけ終える |
| エ | 正気を失ってしまった | エ | 不意をつかれる |
| オ | 姿をくらましてしまった | オ | 犯人を見つけ出す |

問3 波線部a～eの「て」の中から文法的に異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

問4 傍線部①「また射んとすれば」を口語訳せよ。

問5 傍線部②「人のつくるにこそありけれ」とあるが、ここでの侍についての説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 侍は突然走り出した自分の馬が人に変身し家に放火したのを見て、何かの間違いであってほしいと思っている。

イ 侍は自分の家に火をつけたのが人であればよかったのと思ひ、狐が放火した現実を受け入れようとしていない。

ウ 侍は狐を追いかけることに夢中になるあまり一部始終を見ておらず、誰が家に火をつけたのか考えあぐねている。

エ 侍は誰かが自分の家に放火したのだと思ひ込んでおり、人に化けた狐が火を放つたことに全く気付いていない。

オ 侍は狐に危害を加えているところを男に見られたように感じ、その男に尾行されているのではと疑っている。

問6 本文から読み取れる教訓を、解答欄に合うように三十文字以内で説明せよ。